

18世紀前期の対馬における被官

—勘右衛門・甚介・嘉右衛門—

早川 駿治

日本史学専門 博士前期課程2年

はじめに

18世紀前期に対馬藩で府内（厳原）の人口削減を主な任務とした旅人吟味役を研究テーマにしている。しかし、人口削減の対象として現れてくる被官・下人・拝領者・上方抱者といった人びとが、先行研究では実態を十分に解明しきれていない。そこで本プロジェクトでは、これらの人びとの実態を明らかにすることを目標にした。調査は平成25年6月4日～9日及び10月22日～25日の日程で、長崎県立対馬歴史民俗資料館所蔵の宗家文書から関係史料を収集（閲覧・撮影）した。本報告ではこの調査による成果を活かして、対馬藩の年寄（家老）の被官であった勘右衛門・甚介・嘉右衛門という三人の人物を、特に勘右衛門を中心に紹介したい。

本稿は勘右衛門の履歴が分かる〈史料一〉を中心に検討していく。しかしその前に、後の説明にも必要になるので、旅人吟味役の説明をしておく。

対馬藩は17世紀終り頃に他国からの流入者により人口が増加していたが、朝鮮貿易の不振から食糧確保が難しくなり、人口削減を図るようになり、宝永3年（1706）11月に人口削減を主な任務とする旅人吟味役が設置された¹⁾。最初には短期的課題として既に発生している窮民に対する救済措置をとり、その後長期的課題として、今後窮民が発生しないようにするために人口削減を図った。その後者の方策は府内（厳原）の竈数（世帯数）に上限を設けてしまうというものであった。

町人については、「御定の内の町人」五百軒を決め、それに入らなかった町人は「御定の外の町人」とされた。「御定の内の町人」は嫡男に家業を継がせて家を存続させることができるが、「御定の内の町人」の次男以下と「御定の外の町人」の嫡男以下の子供はすべて、他国出するか対馬で奉公するかのどちらかしなければならないとし、府内で家を存続できないようにした。これは「末々之者」が「元々奉公を嫌ひ候人情」であることを利用して、「奉公を嫌候心ニ而他国出を

願可申」ことを狙ったのである²⁾。「御定の内の町人」に選ばれたのは(1)御目見をした「町六十人」³⁾、(2)御目見をした「町六十人」の子孫、(3)今後御目見を仰せ付けられるべき者、(4)中分以上の身代のよい平町人、(5)身代は軽くとも府内に居なければ叶わない家業をしている者（諸職人商人）、であった。

被官（後述）は、初めは町人に含めて扱われていたが、「御定の内の町人」五百軒を決める際にいかがわしいところがあるとして、町人とは別に「御定の内の被官竈」と「御定の外の被官竈」が設定されることになった。町人と同様に、「御定の内の被官竈」は家を存続できるが、「御定の外の被官竈」は府内で家を存続させられなくなった。当初は、「御定の内の被官竈」になるのは代々の被官竈すべてと拝領者（後述）・上方抱永代者⁴⁾の半分、拝領者・上方抱永代者のもう半部分が「御定の外の被官竈」になるとされたが、後に変更され、代々の被官・拝領者はすべて存続させて、上方抱永代者の内、身代が中分以上の者の半分の存続させ、そのもう半分と身代が中分以下の者が削減の対象とされた。ただし例外があり、代々の被官・拝領者を一竈も持たない馬廻り衆⁵⁾は身代中分以下の上方抱永代者の半分の存続が認められた。また、町にいる被官をどこまで被官として認めるか、ということも問題になった⁶⁾。

勘右衛門

杉村頼母の申し立て

さて、このような方針で、旅人吟味役によってまず年寄の被官について吟味がなされ、宝永5年4月9日に「下極め」（後述〈史料五〉）が年寄に提出された。この「下極め」に対して年寄の杉村頼母が宝永5年5月5日に彼の被官のうち四名について異議を旅人吟味役へ出している。その内の一人が勘右衛門であり、次のように書いている⁷⁾。

〈史料一〉

大工 勘右衛門

右者拝領被仰付候砌大工職為相止家内ニ召仕、其後外様ニ召置候付、御作事方江申達又々大工職為仕大工帳ニも載置申候而、町江差置申候、然処拙子酉ノ年江戸表江急ニ罷登候付、家来大勢召連候故宮谷屋敷守り無之ニ付而、当時屋敷守リニ仕置候処、打続朝鮮江戸江又々罷越候付而、直ニ去々年人改之節迄召置申候、右之訳と申畢竟大工職之者ニ而御座候故、町被官ニ被仰付被下候^(ママ)而も差支候儀者有御座間敷様ニ存候故、町被官ニ願申御事

ここに記された勘右衛門の履歴を順に見ていくことにしたい。

拝領

初めに、勘右衛門は「拝領被仰付」られたとあるが、これは犯罪者が藩士に与えられて労役させられるという奴刑に処せられたことを意味する。対馬では室町時代から島主または守護代より御判物をもって下人が賜与される（「被成下」と表現される）慣行が存在し、元禄～正徳頃にかけて以下の種類を持ち法整備された奴婢制として成立してきた。府内の藩士に拝領される場合（府内奴）もあれば、田舎（府内以外の八郷を指してこのように言う）の藩士に拝領される場合（田舎奴）もある。また年限のある場合（年切奴）もない場合（永代奴）もあり、犯罪者本人だけでなく縁座によってその妻子・下人もこの刑に処せられることがある（曳科奴）。また、藩士に与えられる場合（拝領奴）が最も多いが、時代が下ると役所に配属され道路河川の工事・浚渫や海上労務など労役に従事する場合もあった（公役奴）。初めは奴婢身分に落とす身分刑に重点が置かれていたが、正徳5年（1715）以降年切奴が広く行われるようになって、労役刑に重点が移っていった⁸⁾。

藩士が受けた拝領者が、藩士ごとに一覧にされている『御家中江人被下帳』と題された史料があり、その杉村頼母の項に、元禄15年（1702）2月付で勘右衛門の名が見える。ただ、福寿丸水夫の肩書きを持っている。この日には勘右衛門の女房と世倅の喜太郎、さらに財部利右衛門下男の清六と合わせて、計四名が「被成下」ていた。

勘右衛門が拝領になった原因は何であろうか。この史料にはどんな科によって拝領になったかは記されていない。この史料を見ていると、同年月に拝領になっている者が多数おり、福寿丸、日吉丸、財部利右衛門などの関係者が一斉に拝領になっていることが分かる

表：元禄15年2月に奴刑に処された者

拝領を受けた藩士	奴刑に処された者
杉村三郎左衛門	福寿丸水夫市右衛門女房、日吉丸水夫清右衛門女房、同人世倅・清五郎、財部平七
大浦忠左衛門	財部利右衛門、同人女房、福寿丸水夫・五郎助
樋口佐左衛門	財部甚兵衛、佐々木源蔵女房、孫市、忠市、又市
嶋雄多内	三（日誤カ）吉丸水夫・伝兵衛、財部利右衛門下女・たつ
鈴木政右衛門	財部利右衛門下男・吉兵衛
中庭茂兵衛	三（日誤カ）吉丸水夫・伴助
杉村頼母	福寿丸水夫・勘右衛門、同人女房、同世倅・喜太郎、財部利右衛門下男・清六
寺田一郎兵衛	畑原平助、三（日誤カ）吉丸水夫・喜右衛門、同人女房
俵五郎左衛門	財部利右衛門下男・喜三郎、日吉丸水夫五兵衛母、同人娘・まつ
杉村又左衛門	浅井平右衛門下男・利右衛門（抹消）、利右衛門女房、利右衛門子・猪之助、佐々木源蔵下男・長助
吉田十兵衛	財部利右衛門下男・市五郎
鈴木権平	福寿丸水夫市右衛門娘・ふり

出典：『御家中江人被下帳』（宗家文庫史料目録 記録類Ⅲ、17奴婢1(1)）

〈表〉。ここには現れなかったが、日吉丸水夫伝兵衛について、対馬藩の処罰記録である『科人帳』元禄15年2月条に次の記事があるようである⁹⁾。

〈史料二〉

畑源之助子

日吉丸水夫 伝兵衛

右ハ佐々木源蔵・須川新左衛門家来五右衛門両人之銀^(ママ)・自分之船都合八百目余樽へ仕込、朝鮮渡海之船くり乗可申との企仕候段相願^(願誤カ)候依科、急度死罪ニも可被仰付候へ共、此度者御慈悲を以一命御助被成、豆酸郷奉行役山下清右衛門江永代之奴ニ被成下候事

佐々木源蔵・五右衛門の銀を伝兵衛に託して朝鮮渡海を企んだという。つまり密貿易未遂である。このことが露顕して伝兵衛は山下清右衛門の永代奴になった。この事件の関係者一同が処罰され、勘右衛門もそのうちの一人であったと思われる。

では、大工の勘右衛門がなぜ水夫の肩書きで拝領されたのか。それを知るために次の史料を見たい¹⁰⁾。

〈史料三〉

一、以前御巡見上使御下り之時分之漕船之儀、船と船頭ハ町方出し、水夫ハ大工より公役ニ出候由ニ御座候、就夫今程府内ニ而渡世成りかね候

大工数多田舎持キニ下り居申候間、大工之類之職人ニ而も櫓ニ叶候者斗田舎持を可被差免由被仰付、心掛候而櫓を推し覚へ水夫公役をも相務候様ニ被成度御事と奉存候

以前（今回は延宝9年（1681））巡見使が来たときに、船と船頭は町から出し、水夫は大工に公役として務めさせた。今渡世できない大工が大勢田舎稼ぎに出ているが、今後は「櫓ニ叶」う者、つまり水夫の働きができる者にだけ田舎稼ぎを許可したい、という記事である。ここで大工が公役として水夫を務めることが分かる。勘右衛門は、普段は大工として生業を持っており、公役として福寿丸の水夫を務めたときに密貿易が露顕して奴刑に処せられた。そのため『御家中江人被下帳』には勘右衛門は水夫として記録されたのである。

被官

杉村頼母は勘右衛門を拝領し「家内ニ召仕」い、その後「外様ニ召置」いた。文脈から「外様ニ召置」と後の「町江差置」とが同じことを指している。対馬では藩士に従属しつつも町にいる者が存在し、被官（町被官）といった。

被官は一般的には「門屋・名子・被官などは、家族を構成して主家である本百姓のもとに、譜代として人身的に拘束・従属する存在である」¹¹⁾とされ、百姓に従属するのであって武士に従属するのではないのだが、対馬では武士に従属する存在としてある。またこれと対比的に下人は「同じ従属する百姓でも、家族を持たず単身者の場合は下人（譜代下人）と呼ばれた」¹²⁾とされる。

対馬における被官と一般的なそれとの違いが、主人が百姓であるか武士であるかの違いに留まらない。まず押さえておきたいことは、独自に生業を持っていることである。「御定の内の町人」を決める際に当初は「御家中之被官町ニ而中分以上之商売ニ仕付居候者国用を達し候家職ニ仕付居候者も入り可申」¹³⁾とされていた。この史料の後の方に「御定の内の町人」が書き上げられているが、身代は軽くとも府内に居なければ叶わない家業をしている者の中に、被官の肩書きを持つ者も一緒に書かれている。そこから鍛冶、紺屋、仕立屋、桶屋、昼指屋、野菜肴屋、鋤屋といった生業をしていた被官がいたことが分かる。被官は主人の屋敷内などに竈立てをする被官もいるが、それでも生業は独自に持っていたようである。これは少数であり、多くの被官は町にいてそれぞれ生業を持っていたようである。

ある。

府内竈数の制限で町人と被官とが別に扱われるようになったことから分かるように、町で独自に生業を持っているとしても被官であって町人とはされない。したがって被官は主人に従属していることは変わらないはずである。ではどのような務めを主人に対して果したのか。史料から確認できるところでは、主人の供をしたことが挙げられる。被官竈の制限において、代々の被官・拝領者を一竈も持たない馬廻り衆については例外的に上方抱永代者で身代中分以下の者の半分を所持し続けることが認められたが、馬廻り衆のみ認められて大小姓御徒には認められないその理由として「御馬廻り衆ハ指立たる儀ニ被召仕候節供を数人被連候事も有之、大小姓御徒衆ハ数人被連候儀無之故」¹⁴⁾が挙げられている。他の史料でもう少し具体的に「年始盂蘭盆等之礼日之供」¹⁵⁾とあり、そのような何かことあるときに臨時に主人のもとで働いたものと推測される。

また、被官竈の削減に際し、次のような懸念も出されていた¹⁶⁾。

〈史料四〉

一、町改ニ成り居候代々被官ハ被官竈数之内ニ入り申間敷事ニ候由、先頃被差出候書付ニ相見へ居候、其被之方^(官脱力)之申分ニ私儀主人之家内を外レ町役ニ成居申候故、被官竈数之外ニ成候、然共嫡子次男共ニ何とそ本主之家内ニ奉公仕り候様ニ被仰付被下候得と申出候ハ、如何可被申付候哉

「町改」とは、宗門改を町の一員として受けることを指し、被官や下人は主人の家の一員として受ける（家内改）のが原則であるようである。町改になっていたために被官と認められず被官ではなくなった者が、子供を本主の家で奉公させたいと願い出たときどうするとよいかと、ある年寄が旅人吟味役に尋ねているのである。旅人吟味役の回答は省略するが、ここで被官と主人とが経済外的な関係でつながっていたことを見ておきたい。ただ、別の史料では「代々之被官も其子共を主人へ奉公仕らせ候儀ハ不快事之様ニ存候者も多く」¹⁷⁾ともあり、子を奉公に出したくない被官も存在した¹⁸⁾。しかし、子を奉公させることについて「天龍院様御代之初迄ハ御家中町中ニ上方之奉公人を抱下シ候与申ス儀甚希なる事ニ而、御家中之下人ニ者被官之子共を召遣イ、身代軽キ侍衆并町人元之被官無之候者雇者有次第ニ召遣イ」¹⁹⁾ともあり、子主人の下に奉公させることはもともと一般的なことだ

ったのではないと思われる。

下人は「奉公」する、「抱」えられる、「召遣」われるといった語と対応しており、主人の家に住み込みで下働きなどをしているような存在と推測される。勘右衛門は初め下人として「家内に召仕」われ、後に被官として「町江差置」かれて、大工を生業として生計を立てるようになったのである。

ところで「御定の内の町人」に府内に居なければ叶わない家業をしている者（諸職人商人）も選ばれたが、実は職人すべてがそこに含まれたわけではなかった。含まれない職人について、大工・木挽・屋根葺などが作事方に付き、船頭・梶取などが御船掛所に付き、田舎鉄砲鍛冶が御郡方に付くはずだとされている²⁰⁾。また、「役方を外れ」たり「役方ニ入」ったりするときはその役頭から旅人吟味役所に申し届けをするようにとされている²¹⁾。詳しいことは不明ながら、町人とは別に、関係する役所で職人ごとに把握されていたのだろう。

〈史料一〉に見える「大工帳」とは作事方が大工を把握するために作成している帳面であろう。勘右衛門は杉村頼母の「家内ニ召仕」われる間は大工は止め、被官として町に出て大工を生業とするようになって、作事方に通達して再び「大工帳」に載せられた。

旅人吟味役による吟味

酉年（宝永2年）に杉村頼母が急に江戸に行くことになり、家来も大勢連れて行くために、宮谷屋敷の屋敷守をする人がいなくなってしまい、勘右衛門に屋敷守をさせることになった。宮谷は巖原北部の地名で、府内の中心地からは少し離れる。〈史料六〉からこれが掛屋敷（下屋敷のことか）と分かる。勘右衛門が被官であったために屋敷守をすることになったのだろう。杉村頼母が江戸から帰ってくれば屋敷守も終わるはずだったが、朝鮮・江戸へ出かけることが続いたため、勘右衛門の宮谷屋敷の屋敷守も続き、「去々年人改之節」もまだ屋敷守のままであった。

「去々年」は宝永3年で、旅人吟味役が設置された年であり、設置と同日付で府内人口の調査が指示されている。窮民御救いや人口削減の方策に利用するためであろう。藩士分については「御家中家内改ニ入り居候下人之内何人ハ家内ニ罷在、何人ハ下屋敷ニ罷在、何人ハ町ニ罷有候与之儀、相知候様ニ帳面ニ仕立させ可被申候事」²²⁾とされている。初めに「下人」と書かれるが、前節で確認した被官のあり方からすれば「町ニ罷有」る者には被官も含まれると思われる。

この後、はじめに述べたように旅人吟味役によって府内人口削減策が進められていく。宝永5年4月9日に年寄に提出された、旅人吟味役による年寄の被官の吟味の「下極め」では、勘右衛門は次のように評価された²³⁾。

〈史料五〉

勘右衛門（他三名略）

右ハ主人之居屋敷掛屋敷ニ竈を立テ居申候故、以来他人之掛屋敷開キ所等ニ移リ候ニハ相障リ候儀無御座、町ニ竈を立テ候儀ハ相障リ可申儀と僉議仕リ屋敷内之被官竈数ニ入レ申候

屋敷守をしていたことが、屋敷内に竈立てをしていると捉えられてしまい、他人の掛屋敷や「開キ所」（開墾した土地）に移ることは良いが、町に竈を立てることには支障がある、という吟味結果である。人口削減策が府内の竈数に上限を設けるものであるため、新規の竈立ても規制されることになる。屋敷内から屋敷内に移動することは町の竈数を増やさず、「開キ所」は町でないのもこれも町の竈数を増やさないので問題ない。屋敷内から町に出て竈を立てると町の竈数が増えるため、これは禁止とされたのである。

これに対して杉村頼母から異議を申し立てたのが〈史料一〉であり、本来大工職の者であり町に竈立てしていた被官であるので、町竈を許してもそれは新たに増えることにはならない、このようなわけなので勘右衛門を町被官としてほしい、とこういうわけである。

これに対して旅人吟味役から、以下のように返答された²⁴⁾。

〈史料六〉

一、勘右衛門儀、二月十八日ニ会所ニ御出し被成候被官竈之御書付ニハ大工職仕リ当時宮谷掛屋敷之内ニ被召置候由御書載被成候ゆへ、町被官ニハ成リ不申掛屋敷之被官ニ成リ可申儀与僉議仕リ其通りニ申上置候、当月五日之御書付ニハ前以町ニ被召置其後旅ニ御勤之節宮谷掛屋敷之屋舗守リニ被召置候由委ク御書載被成、其次第承合セ候処、弥御書付之通りニ而御座候、然ル上ハ町被官ニ成リ可申儀与奉存候

内容的に繰り返しが多くなるので結論部分のみ説明すると、「其次第承合セ」つまり申し立ての内容が本当か確認したところ、杉村頼母からの書付の通り間違いないので、勘右衛門は町被官とする、というものである。

甚介・嘉右衛門

甚介

簡単にではあるが、もう二人紹介したい。甚介も勘右衛門と同じく杉村頼母の被官であり、旅人吟味役による吟味によって掛屋敷に竈を立てている者とされた。〈史料七〉はそれに対しての杉村頼母の申し分である²⁵⁾。

〈史料七〉

甚介

右者御料理人相谷曾兵衛家来拝領仕候、前以方外様ニ罷有候、宮谷町支配之内成相出口ニ其身家屋鋪所持仕居候、私江拝領被仰付候節右之家屋敷曾兵衛名ニ而之候ゆへ御払ニ罷成候を、又々其身買調直住居仕今以罷有候、拙子屋敷ニ而ハ無御座候ゆへ町被官之儀願申候事

杉村頼母は御料理人相谷曾兵衛家来の甚介を拝領し、彼は相谷曾兵衛家来のとき既に被官として町に居住していた。宮谷町の成相寺出口あたりに甚介は家屋敷を所持していたが、杉村頼母に拝領になった時点ではその家屋敷は相谷曾兵衛の名になっていた。名目上だけかもしれないが相谷曾兵衛の持ち物だったということだろう。そのため甚介をその屋敷から出させたが、甚介はその家屋敷を買い調え直して再び住みはじめた。だから甚介を町被官にしてほしい。こういう内容である。

旅人吟味役は甚介の家屋敷を杉村頼母の掛屋敷と勘違いしていたため、掛屋敷に竈を立てている者とされていたが、この申し立てによって町被官になった²⁶⁾。

嘉右衛門

嘉右衛門は年寄杉村三郎左衛門の被官である。旅人吟味役による吟味では、開所に竈を立てている者とされた。〈史料八〉はそれに対する杉村三郎左衛門の異議である²⁷⁾。

〈史料八〉

嘉右衛門

右者先年拝領仕数年手前ニ召遣イ、其以後外様召置候処ニ拙者地行所今里村瀬入開キ申所有之ニ付、為下知成就迄当分差下置候、元天道茂町ニ住居仕申候、此者之儀ハ開所成就仕次第府内江呼登セ申候積之者ニ而御座候間、御吟味之上可罷成事ニ候ハ、町被官竈ニ被仰付置被下候様ニ願申候事
嘉右衛門も勘右衛門と同様で、拝領になったのち数年杉村三郎左衛門の家内で「召遣」われたのち、被官

として町に「召置」かれた。その後、杉村三郎左衛門の知行所の今里村で「瀬入開」くところがあるので、その下知をさせに現地に遣わしていたが、それが旅人吟味役に、開所に竈を立てていると間違われた。嘉右衛門はもともとは天道茂町に住んでいて、開所が成就したらまた府内に呼び戻して町に召置くつもりの方であるから、町被官にしてほしい。こういう内容である。

これに対しては、旅人吟味役の回答は、嘉右衛門が天道茂町に居住していた証拠が無く、主人や町内の者の証言だけでは町被官にはできない、というもので、掛屋敷の被官という評価は変えなかった²⁸⁾。

おわりに

奴婢制についての研究では、彼らは奴婢身分に落とされ、強制的に労役させられる抑圧された存在と見られてきた。おそらく「奴婢」といった語に引きずられるところもあったのだろう。

また、対馬の被官とは違いがあるが、他地域で被官と呼ばれるような人びとも長い間、本百姓として自立できずに隷属が続くことになった、弱小な農民像が描かれてきた。しかし、近年これを見直す研究が出されてきている²⁹⁾。

勘右衛門を中心に、甚介、嘉右衛門と三人の事例を見てきたが、三人が弱小で抑圧された人ではなかったことは明らかである。勘右衛門は拝領になっても後には被官ではあるが元の通り大工で生業を立てるようになっており、嘉右衛門も「瀬入開」きを下知するのであって、「瀬入開」きの労働従事者ではない。甚介に至っては家屋敷を購入するだけの経済力を持っていたのである。三人の個別事例であるが、ここからも拝領者や被官などの見直しがせまられるのである。

謝辞

お世話になった長崎県立対馬歴史民俗資料館の皆さまに記してお礼申し上げます。

註

- 1) 岡井建司「寛文～正徳期における対馬府中の人口動態と朝鮮貿易」戴田貫編『近世の畿内と西国』清文堂、2002年。森下「対馬の抱下し者と都市下層社会」『部落問題研究』168、2004年。ちなみに対馬では他国人を指して旅人と表現され、旅人吟味役の旅人もこの意味である。
- 2) 『旅人吟味記録』四、宝永4年9月19日、杉村采女宛、旅人吟味役「口上」。
- 3) 六十人とは、もともとは宗氏に仕えていた武士が対馬に来島するにあたり町人になり朝鮮貿易などの特権を与えられた

- 階層の人々（古六十人）であるが、後に特権を与えられる層がこの由緒を持たない者にも広がった（新六十人）。
- 4) 上方から人身売買同然に対馬に連れてこられた者を上方抱者と言った。
 - 5) 対馬藩士の格に三段階あり、上位から馬廻り、大小姓、御歩行であった。
 - 6) 以上の内容は『旅人吟味記録』一～六による。
 - 7) 『旅人吟味記録』七、宝永5年5月5日、旅人吟味役宛、杉村頼母「覚」。
 - 8) 安河内博『対馬藩に於ける奴婢制成立の研究』（九州史学叢書）、九州大学文学部国史研究室、1953年。
 - 9) 安河内同前書。『科人帳』は可能な限り閲覧・撮影したが、一部史料の状態が悪く閲覧できなかったものがあり、その中の記事と思われる。そのため孫引きとなった。また安河内はこの引用に続いて「彼と同時に七名の水夫・下男等が永代奴に成し下され」と書いている。
 - 10) 『旅人吟味記録』十、宝永6年4月10日、杉村三郎左衛門・大浦忠左衛門宛、旅人吟味役「口上」。
 - 11) 『事典 しらべる江戸時代』（林英夫・青木美智男編集代表、柏書房、2001年）p234、執筆は山本英二。
 - 12) 同前。
 - 13) 『旅人吟味記録』三、宝永4年4月13日、年寄宛、旅人吟味役「口上覚」。
 - 14) 『旅人吟味記録』六、宝永5年3月12日、旅人吟味役宛、年寄「覚」。
 - 15) 『旅人吟味記録』三、宝永4年8月5日、年寄宛、旅人吟味役「口上覚」。
 - 16) 『旅人吟味記録』四、宝永4年9月2日、旅人吟味役宛、杉村采女「覚」。
 - 17) 『旅人吟味記録』一、宝永3年12月5日、年寄宛、旅人吟味役「口上」。
 - 18) 天龍院は宗義真、藩主在任明暦3年(1657)～元禄5年(1692)。
 - 19) 『旅人吟味記録』十一、宝永6年4月24日、杉村三郎左衛門・大浦忠左衛門宛、陶山庄右衛門「口上」。
 - 20) 『旅人吟味記録』三、宝永4年4月13日、「御定町屋之覚」。
 - 21) 『旅人吟味記録』三、宝永4年8月5日、年寄宛、旅人吟味役「口上覚」。
 - 22) 『旅人吟味記録』一、宝永3年11月5日、旅人吟味役宛、年寄「覚」。
 - 23) 『旅人吟味記録』六、宝永5年4月9日、「御年寄中被官竈僉議之覚書」。
 - 24) 『旅人吟味記録』七、宝永5年5月23日、杉村頼母宛、旅人吟味役「口上」。
 - 25) 註7)に同じ。
 - 26) 註24)に同じ。
 - 27) 『旅人吟味記録』七、宝永5年6月29日、旅人吟味役宛、杉村三郎左衛門「覚」。
 - 28) 『旅人吟味記録』八、宝永5年8月3日、杉村三郎左衛門宛、旅人吟味役「口上」。
 - 29) 平野哲哉「前地」後藤雅知編『大地を拓く人びと』（身分的周縁と近世社会1）吉川弘文館、2006年。関口博巨「近世奥能登における「下人」の職能と生活―一時国家の「下人」たち―」『国史学』150、1993年。